

# 近世の橋

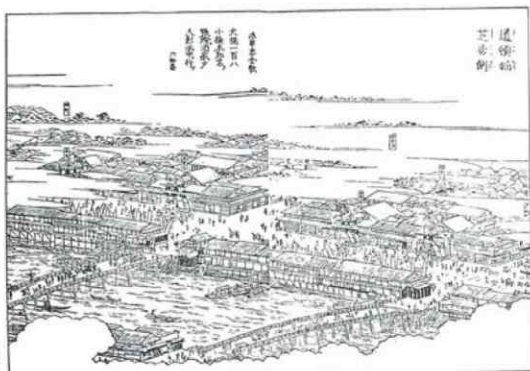
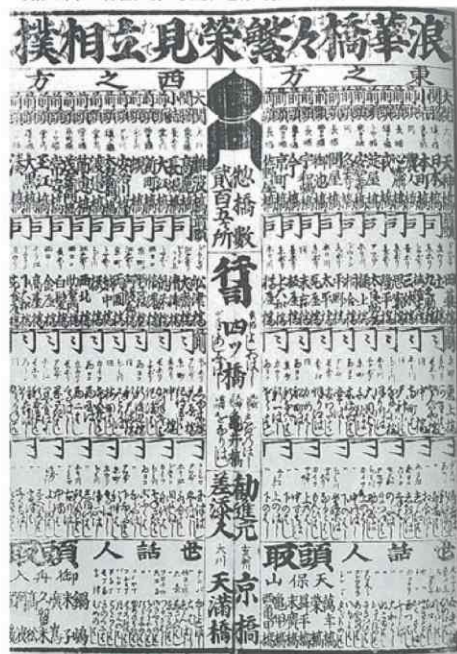
豊臣秀吉が天下を統一し、大阪に本拠を構え、市街地の開発も本格化した。東西両横堀川も、このころ前後して開削されたといわれている。その市街地、船場・島之内の発展にともない、両横堀川にも橋が架けられ始めた。現在大阪城に保存されている高麗橋や幻の橋である大坂橋の擬宝珠（大坂橋は写真と拓本のみ）には、それぞれ慶長9年（1604）や天正13年（1585）の銘が刻まれており、市内の重要な橋は大阪城築城（天正11年、1583）と頃を同じくして架けられたと考えられる。

大阪の陣が終わり、徳川治世になると、大阪は経済の中心地として再び繁栄の道を歩みはじめた。道頓堀川を皮切りに多くの堀川が開削され、順次橋が架けられていく。曾根崎川から道頓堀川までのいわゆる大阪三郷の、江戸時代における橋の数をみると、明暦3年（1657）の「新板大坂之図」には、88橋あった。その後さらに増えていき、天明の頃には150橋程にのぼった。江戸の「八百八町」に対して、「浪華八百八橋」とうたわれたが、実際には大阪三郷の橋は200橋ほどであったといわれている。

春は花見、夏は納涼、秋は月見、冬は雪見と、四季折々に人々は橋に集い、橋は大阪の人々の憩いの場となった。また橋は、祭見物に絶好の場でもあった。なかでも「なにわ三大橋」と呼ばれた天満橋・天神橋・難波橋は、天神祭の船渡御を眺める一等栈敷で、どの橋も人であふれ、橋の上で立ち止まらないうちにお触れが出たほどであった。

夏の熱気をしばし忘れるため、人々は大川へ繰り出した。三大橋は、川風に吹かれて涼をとる人々に大変賑わった。また、川面には納涼船が出て、花火に興じる人も多く、それを目当ての花火売りの船まで現われたということである。

▼「浪華橋々繁栄見立相撲」 （大阪府立中之島図書館蔵）  
天保12年（1841）大阪の橋々を相撲の番付に見立てて紹介。



▶ 道頓堀  
「撰津名所図会」より  
右側の橋が枚橋、左側が  
太左衛門橋。  
（大阪市立中央図書館蔵）

## 公儀橋と町橋

寛永の頃に、市内の重要な橋が幕府の直轄管理となった。これらは公儀橋とよばれ、天満橋・天神橋・難波橋・京橋・鳴野橋・野田橋・備前島橋（御成橋）・高麗橋・本町橋・農人橋・日本橋・長堀橋の12橋である。いずれも三大橋をはじめとした大阪城周辺の橋で、他の橋と区別するため擬宝珠などが付けられていた。

その他の橋は町橋とよばれ、橋近隣の町々で管理費を負担することになっていた。これを橋掛町という。負担は一律ではなく、橋に近い町ほど多く、遠ざかるにつれて少なくなるという合理的なものであった。しかし、木橋であるかゆえに老朽化はやく、多くの出費が必要であったと思われるが、「天下の貨、七分は浪華にあり」といわれた大阪の経済力が、数多くの橋を支えてきたといえる。

江戸時代中頃になると、「べか車」とよばれる荷車が増加した。しかし、べか車が普及するにつれ、橋の傷みも激しくなり、橋を渡る人々の通行の妨げにもなった。そこで、公儀橋では、べか車の通行を禁止したので車は橋詰で分解し、積荷とともに橋上を人力で運ばねばならなかった。また、これを監視するために、橋詰には「役床」とよばれた髪結い床も設けられた。



◀ 高麗橋  
「撰津名所図会」より  
橋詰には高札場が設けられていた。  
（大阪市立中央図書館蔵）



◀ 高麗橋擬宝珠 （大阪城天守館蔵）  
慶長9年（1604）銘が刻まれている。

## 近松文学と橋

上方文化の担い手であった近松門左衛門や井原西鶴は、その作品の中にたびたび橋を登場させている。

なかでも近松は、お初・徳兵衛の心中を題材にした「曾根崎心中」や、小春・治兵衛の「心中天網島」など、一連の世話物の中で効果的に橋を取り入れている。

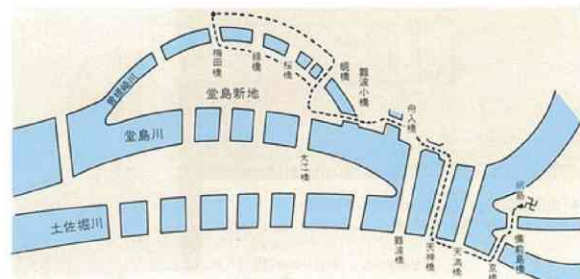
「心中天網島」の中には、「名残の橋づくし」とうづりがある。二人が曾根崎川にかかる梅田橋から、三大橋をへて備前島橋までの道行の後、網島までたどり着くのであるが、橋名を織り込みながら二人の情感を巧みに表現している。このなかには、今では消えてしまった橋も含まれているが、当時の架橋状況がうかがわれる。



▲ 梅田橋 「浪華曾根崎回廊」 （大阪歴史博物館蔵）より  
曾根崎川（観川）に架かる「名残の橋づくし」の起点となる。



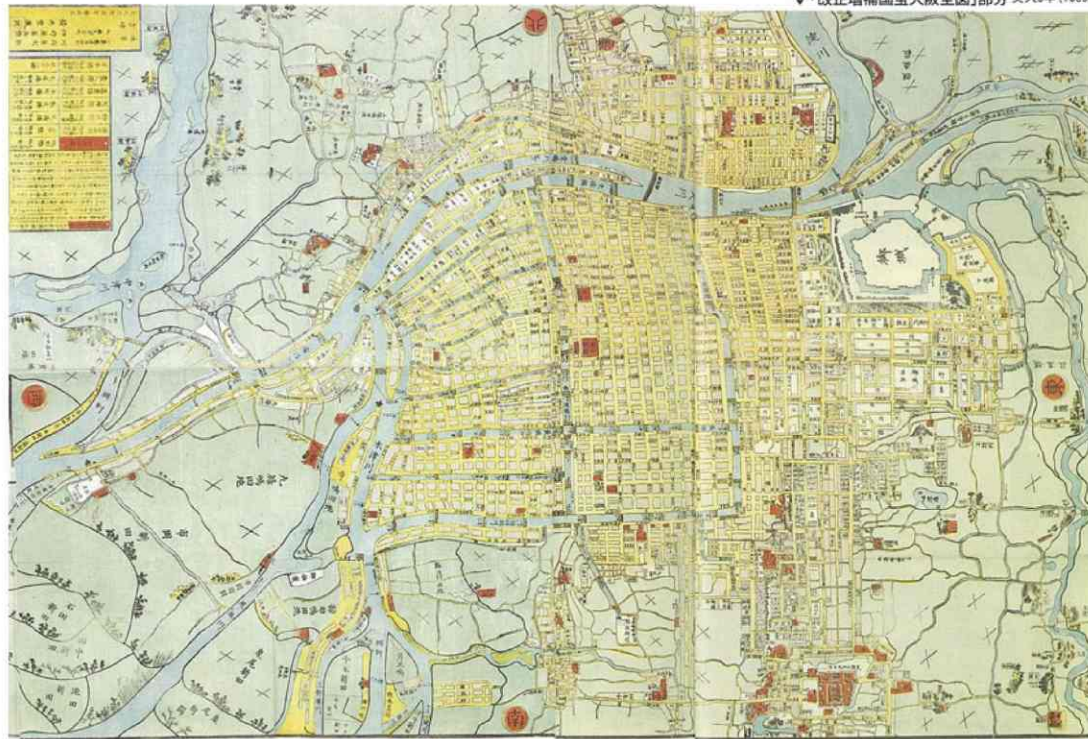
▲ 文案「心中天網島」 近松門左衛門68才のときの作品。



「名残の橋づくし」の道行の図

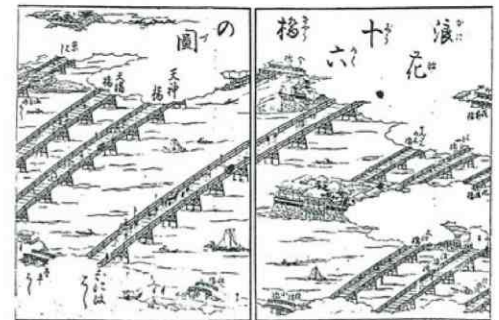
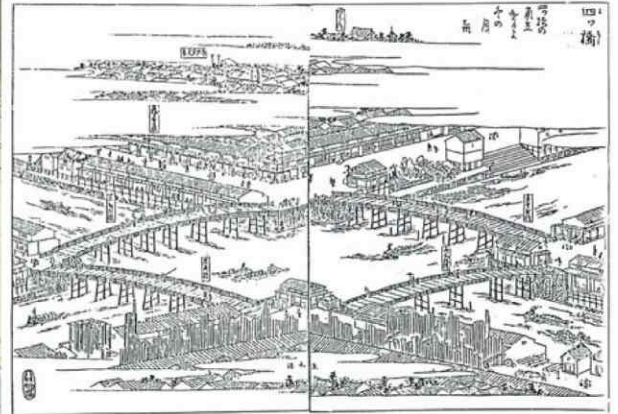
# 絵図にみる橋

江戸時代の大阪市街は、古地図によってその状況を知ることができる。縦横にめぐらされた堀川に架けられた数多くの橋が、これに記されている。また、橋は観光名所ともなり、画題としてよく取り上げられた。これらによって往時の橋の姿・形がしのばれ、人々の橋への愛着をうかがうことができる。



▼「改正増補国宝大阪全国」部分 文久3年(1863)  
(大阪城天守閣蔵)

▼四ツ橋「摂津名所図会」より(大阪歴史博物館蔵)  
西横堀川と長堀川の合流点に架かっていた4つの橋の総称。  
吉野屋橋(右上)、上野橋(右下)、  
下野橋(左上)、炭屋橋(左下)



▲浪花十六橋の図「浪花のなごめ」より  
難波橋(中央の橋)上から見える16橋をあらわしたもの。  
(大阪府立中之島図書館蔵)



▲「大川眺望図」小斎田順画(大阪歴史博物館蔵)  
手前から天満橋、天神橋、難波橋。



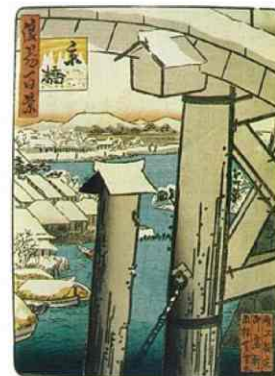
▲「玉江橋景」歌川国貞画(大阪城天守閣蔵)  
堂島川に架かる。橋の向こうに見えるのは  
四天王寺の五重塔。



▲「今橋つぎの風景」歌川国貞画  
(大阪城天守閣蔵)  
八軒家と北浜を結び、多くの人々でにぎわ  
った。



▲「道頓堀太左衛門橋雨中」高村芳雪画  
(大阪城天守閣蔵)  
名代(芝居の興業権保有者)のひとり大坂太左衛門に  
ちなんで命名されたという。



▲「京橋」南村芳雪画(大阪城天守閣蔵)  
京街道の起点で堂島川に架かっている。